

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：31204

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H03572

研究課題名(和文) 臨床倫理システムの哲学的展開と超高齢社会への貢献および医療者養成課程への組み込み

研究課題名(英文) Philosophical development of clinical ethics system and contribution to super-aged society and medical and healthcare education programs

研究代表者

清水 哲郎 (SHIMIZU, Tetsuro)

岩手保健医療大学・看護学部・教授

研究者番号：70117711

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 17,500,000円

研究成果の概要(和文)：(1) 倫理の基本的構造を、皆一緒と人それぞれ のブレンドとして分析し、意思決定に関するパターナリズム、情報共有 - 合意モデル等と社会のあり方の相関性を明らかにした。
 (2) 高齢者本人・家族の意思決定支援に関して、10年間に及ぶ「ポスト健康寿命期」を人生の最終段階と見て、「老いによる衰え」(frailty)が進行するこの時期の暮らし方をACPのテーマとする「老活」を提唱した。
 (3) 研究成果を臨床に還元するべく、ウェブサイト「臨床倫理ネットワーク日本」、臨床倫理セミナー(COVID-19拡大後はオンラインセミナーや動画)等の活動を進め、本研究プロジェクトの成果をまとめた書籍2点を上梓した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

(1) 学術的意義 皆一緒 と 人それぞれ という倫理外の関係にも使える要素に基づき、両者のどのようなバランスを社会が要請するかが、倫理を決めると共に、社会のあり方自体をも決めていることを明らかにした。
 (2) 社会的意義 現在の社会に相応しい意思決定支援の考え方を臨床現場に提供した。すなわち、「情報共有 - 合意モデル」および「人生と生命の区別」は、高齢者の人工的水分・栄養補給に関するガイドライン(2012)を皮切りに、最近では慢性腎不全や呼吸不全をテーマに関係学会等が協働して作成した患者の治療選択を支援するツールに採用されるなど、社会における医療・ケアのあり方に実質的に影響を及ぼしている。

研究成果の概要(英文)： We tried to analyze the ethics in our society using the two principles of human relationship: "live by helping each other" and "live and let live," and recognized that, e.g., Paternalism, besides Aristocracy, was natural and even might have been appropriate in societies where the former principle was dominant, while respect for autonomy is absolutely recognized in those where the latter one is dominant. In Japanese society nowadays, by contrast, a balance between the two principles should be sought, which can be actualized in medical contexts by our version of shared decision-making.

"Post healthy life-span" is the period when elderly people are living with frailty. It is said to last for about ten years on average. The period is appropriately understood as "end-of-life period" and advance care planning (ACP) for this period should be promoted. We made support tools for elderly people's ACP, as well as contributed to some authorized guidelines for ACP.

研究分野：哲学、臨床倫理、臨床死生学

キーワード：臨床倫理 皆一緒と人それぞれ 社会の倫理 情報共有 - 合意モデル 意思決定支援 ACP 超高齢社会
ポスト健康寿命期

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究が関わる医療・ケアとその周辺領域の「学術的」背景を、本研究グループは次のように把握した。

日本の医療現場は、医療者と患者本人(および家族)のコミュニケーションのあり方について、80年代後半から90年代初頭以来「医師は説明し、患者本人が選ぶ」という患者の自律尊重を強調する米国から導入した倫理が支配的となり、現代なおその傾向が存続している。理論的ベースなしに、人間関係の文化が異なる米国からただ表層を輸入しただけの自律尊重優位の倫理が現場の建前となったために、医療者・患者のコミュニケーションを促進することにはならなかった。

こうした状況の中で、研究代表者は1980年代後半より「**医療現場に臨む哲学¹⁾**」として医療・ケア従事者と共同で臨床現場の問題を考え始め、やがて「臨床倫理」に哲学・倫理が寄与する可能性を見出した。臨床現場でケア提供側と受ける側との間で起きる具体的問題(個別事例)に取り組み、「どうしたらよいか」を個別に考える営みを掘り下げると、人と人との倫理が新たに現実的なものとして見えてきた。ここから個別事例に対応でき、かつ理論的にも批判に耐え得る臨床倫理のシステムという構想に至り、研究グループ(**臨床倫理プロジェクト**)を立ち上げた。

(2) 臨床倫理プロジェクトは1999年に始まった。基盤研究(B)「医療現場における価値選択と共同行為に関するガイドラインと評価システムの開発」(1999-2001年度)、萌芽研究「臨床倫理学の哲学的基礎付けと医療現場における実用化」(2002-2003年度)、および日本学術振興会 人文・社会科学振興プロジェクト研究事業「医療システムと倫理」(2003~2007年度)を通して、同プロジェクトの基本的考え方を形成し、臨床現場と連携し、実際の事例を共同で検討しながら研究を進めた。その後、東京大学グローバルCOE「死生学の展開と組織化」(2007~2011年度)に参加して、臨床倫理を臨床死生学と融合させ、生死の評価についての見解を事例の倫理的検討に反映させるようにした。各地の医療者と共同で行う臨床倫理セミナーは2003年に始め、臨床現場から提供される事例を検討する実践を通して、検討法の改訂を重ねた。

さらに、科研費 基盤研究(A)「ケア現場の意思決定プロセスを支援する臨床倫理検討システムの展開と有効性の検証」(2011~2014年度)、および「臨床倫理検討システムの哲学的見直しと臨床現場・教育現場における展開」(2015~2017年度：これは2018年度までの計画であったが、最終年度に本研究にきりかえた)により、次代を担う研究者や医療・介護従事者の参加を得、医療・介護の諸領域に臨床倫理の活動を広げ、ケア従事者の研修のための冊子『臨床倫理エッセンシャルズ²⁾』とカリキュラムを整備し、臨床倫理ファシリテーター養成や、eラーニング作成等を行った。このような活動の結果、各地に医療・ケア従事者たちのグループができ、臨床倫理セミナーは毎年10~12回開催し、延べ約2,000人/年の参加者を得るようになった。また、**医療系専門職養成課程への臨床倫理の組み込み**の検討は2015年度から研究課題に加えた。

以上のような経過を通して、本研究プロジェクトの基本的主張は、次の3点にまとまってきた。

倫理の構造を「**《皆一緒》と《人それぞれ》の人間関係ブレンド**」として考え、**社会がそのメンバーに両者のどのようなブレンドを要請するかが、その社会の倫理となる。**
〔ケアの進め方〕医療従事者と患者・家族は**共同行為として医療・ケアを進める**。そこから意思決定プロセスに関する**情報共有-合意モデル**が適切なあり方として帰結する
〔ケアの目的〕医療は、本人の人生にとっての**最善を目指して生物学的生命をコントロールする**

(3) 上記のとおりは、人工的水分・栄養補給に関する日本老年医学会のガイドライン³⁾(2012年6月)に採用され、また厚生労働省の「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン⁴⁾」(2018年3月)が提示する指針もこれと軌を一にしている。

また、本研究グループは、本研究と並行して、人工的水分・栄養補給や、人工透析導入等について本人・家族が考え選ぶ過程を支援するツール(意思決定プロセスノート⁵⁾)等を開発、さらに、JST-RISTEXの研究開発プロジェクト「高齢者ケアにおける意思決定を支える文化の創成」(受託研究：2012年度後半~2015年度前半)を進め、市民の意識アップデートの方策検討と高齢者・家族の意思決定支援ツール「心積りノート」の研究開発は、高齢者本人・家族の意思決定支援に関わる、社会貢献となった。

こうした成果を受けて、2018年度に始まる本研究は、これまでの科学研究費補助金による研究課題のテーマに加えて、**超高齢社会の主要問題である高齢者の意思決定支援に関する成果を受け継ぐ更なる研究開発を併せ行うこととした**。そこで、上述の**情報共有-合意モデル**と**本人の人生にとっての最善**という基本的主張が、**高齢者本人と共に決めて行く意思決定支援**にも有効であるという見込みの下、ACPを具体的・実用的にする研究開発に取り組むこととした。

2. 研究の目的

以上の現状把握と志向を踏まえて、本研究の目的を次のように定めた：

(1) 本研究グループの**臨床倫理の理論と実践が倫理一般にもたらす知見の哲学的検討**をさら

に推進すると共に、**超高齢社会の課題解決のために臨床倫理システムがより具体的に貢献できる方途を研究開発**する。そのため、高齢者本人・家族の意思決定支援のツール『心積りノート』の研究開発を見直し、その実用化と連動させつつ、**ポスト健康寿命期の高齢者の生き方と受ける医療やケアに関する意思決定支援のあり方について具体的な提言を目指す。**

- (2) **医療・介護従事者たちの臨床倫理実践のネットワークを充実させ、臨床倫理の臨床現場への浸透・活性化に加えて、地域包括ケアをはじめとする地域社会の人間関係の再構築への貢献を図る。ネットワークは研究者とケア従事者との共同研究を進める場となる。**
- (3) **医療・福祉系大学の課程の中で、さしあたって看護職養成課程を取り上げ、新設大学をモデルにして、教育課程に臨床倫理を組み込む方途を研究開発し、さらに他の医療系大学への適用の道を探る。**

3. 研究の方法

次のような研究組織により活動を進める。以下、チーム毎に「何をどのように、どこまで明らかにしようとするか」を記す。

- (1) **哲学・倫理 - 超高齢社会チーム** 前項に記した研究目的(1)を担当し、次の課題に取り組む：**皆一緒 と 人それぞれ のブレンドとして、社会的要請としての倫理の構造を分析し、それによって社会のあり方自体をも理解する理論の研究を進める。**
超高齢社会における高齢者のウェルビーイングについて、ポスト健康寿命期全体を見渡して暮らしとケアを考え、「フレイル」(老いによる心身の機能の衰え)理解を国際的研究状況の中で見直し、フレイルの進行に応じた暮らしとケアに関する提言をする。
- (2) **臨床倫理ネットワークチーム** 研究目的(2)を担当し、次の課題に取り組む：
全国各地における臨床倫理セミナーおよびファシリテーター養成研修開催し、研究成果の臨床現場への還元とともに、臨床現場の必要性を情報収集し、必要に応じて臨床倫理システムの更なる改訂を行う。
この点は、2019年度第4四半期以降、COVID-19の拡大により対面式研修が困難になったため、**オンラインコンテンツの充実やオンラインセミナー開催に重点を移した。**
事例検討シートの改訂(臨床現場における実効性を高めるための改訂が喫緊の課題である)を行い、臨床倫理事例検討システム全体を見直し、**臨床倫理の基本テキストを製作する。**
全国的ネットワークのため**ウェブサイトの充実・改訂を行う。**この点には、2019年度第4四半期以降のCOVID-19の拡大により、上記に記したように重点をおくこととなった。
臨床倫理システムを、地域包括ケアの実現に活かす可能性を追求し、(1)のチームと連携しつつ、**ポスト健康寿命期全体を眺めつつ心積りする「老活」という提言を完成させる。**
- (3) **看護学教育課程への組込みチーム** 研究目的(3)を担当し、次の課題に取り組む：
新設の岩手保健医療大学をフィールドとして、核となる5授業科目(1年次：探求の基礎、2年次：看護倫理、人間の生と死、3年次：エンドオブライフケア論、4年次：臨床倫理)について、**学生を協力者として授業テキストを研究開発する。**
他の授業科目について倫理面への言及の可能性と、核となる科目との連携を検討する。
上述の看護系のテキスト開発に基づき、他の医療系カリキュラムに臨床倫理を組み込む可能性を検討し、研究成果として医療系に汎用性のある倫理系テキスト作成を目指す。

4. 研究成果

本研究グループ(臨床倫理プロジェクト)は、本研究課題の目的と前研究課題までの達成状況を踏まえ、研究活動を推進した結果、多くの研究成果を得た。以下、上述の研究目的と研究方法に挙げた項目に対応させて記す。

(1) 臨床倫理の基礎理論の哲学的検討と超高齢社会への貢献の可能性の探求

臨床倫理の基礎理論とその射程の哲学的検討 皆一緒 と 人それぞれ のブレンドとして、社会的要請としての倫理の構造を分析し、それによって社会のあり方自体をも理解する理論の研究を進めた。その結果、意思決定プロセスに関して、これまで臨床倫理研修等において、「**パターナリズム**」、「**説明-同意モデル**」を引き合いに出しながら、「**情報共有-合意モデル**」を説明してきたが、これらのタイプが**社会を構成するメンバー間の人間関係のあり方(= 皆一緒 と 人それぞれ のブレンドの仕方)に関する社会的要請と表裏一体の関係にあること**を見出した。すなわち、**パターナリズム**は伝統的な**皆一緒**が**支配的な社会ないしコミュニティにおいては自然なあり方**であり、これは古代哲学における**アリストクラシー**(「**貴族制**」)と訳されるが、原義は「**優れた者による支配**」の推奨以来、**皆一緒**という関係を前提すれば、トピックに応じてその途の**権威の指導に従うことが最善**という主張から理解できる。対して、**説明-同意モデル**は**人それぞれ**に傾いた社会において様々な領域で見出される。**情報共有-合意モデル**は日本の現在において**希求される人間関係(= 皆一緒 と 人それぞれ のバランスよいブレンド)**、また**憲法が示す相互扶助と相互独立のバランス**を表すものである、等。これらについては、以下

の(3)で示す文献等で発表した。

なお、皆一緒 と 人それぞれ という2タイプの基本的人間関係の並存という理解が、2019年度第4四半期以来のCOVID-19拡大にともなう「自粛」「同調圧力」「自粛警察」等をキーワードとする個人と社会のあり方検討にも有効であることをも確認した(2020年度)。

また、医療機関という組織の倫理という観点を導入して、市民としての倫理、医療・ケアに従事する者としての倫理に加えて、組織に属する者としての倫理の3つの観点で考えることにも取り組み、成果を、書籍『看護管理者のための臨床倫理・組織倫理入門』⁶の企画と基調論文執筆に活かした(2020年度末)。

超高齢社会の課題解決への参与 に記した哲学的検討を踏まえ、超高齢社会の課題解決のためにより具体的に貢献できる方途を探り、高齢者本人・家族の意思決定支援のツール『心積りノート』(初版2015年11月、改訂版2018年3月)のさらなる改訂を進め、使い勝手のよいものとするため**短縮版を開発**した(pdf版およびeBook版をウェブ上で公表、2019年⁷)。

この過程で、「高齢による人生の最終段階」の規定、最終段階における医療・ケアの選択の基礎となる価値観の明確化に関わる基本的検討を進め、**平均10年間といわれるポスト健康寿命期をどう生きるかとして老活を進める提言、「ポスト健康寿命期」を「人生の最終段階」とする提案、ACP(アドバンス・ケア・プランニング)を死の直前のことに限定せず、ポスト健康寿命期の暮らし方に広げる提言等**を行った(論文、学会講演等)。

これらに関しては、老年医学における「フレイル」(frailty:老いによる心身の機能の衰え)理解を国際的研究状況の中で見直し、「フレイル」理解が現在日本においては健康寿命の延伸を目指す研究と実践の中でのみされていることに対して、**ポスト健康寿命期における「老いによる衰え」(frailty)の進行という面に向かう必要性**を提唱し、老いによる衰えの進行度を把握するために国際的に使われているスケール⁸を導入し、ACPなど衰えの進行に応じた意思決定支援に活かす提言を行った(論文、書籍、学会講演等の他次項(2)の成果となる書籍⁹)。

以上に連関して、**認知症者の意思決定支援**について、本プロジェクトの情報共有-合意モデル、生命に対する人生の優位に加え、**身体的 frailty と認知症による「できなくなること」を繋げた考え方を**総合して、『看護技術』2022年5月号の特集として、認知症者に対する意思決定支援の考え方(フレイルティの進行度と認知症の進行度の関連、および進行度に応じた本人の意思決定への参加のあり方および人生にとっての最善の理解を含む)および本研究が開発した臨床倫理検討シートを使う意思決定支援の進め方について提言を公表した¹⁰。

既に言及した情報共有-合意モデルは、上述の高齢者の意思決定支援のあり方に関する提言と併せて、**関係学会が協働して作成した慢性腎不全や呼吸不全をもつ患者の治療選択を支援するツール**^{11,12}の中核となる考え方としても採用されるなど、本研究の2021年度までの研究成果が本研究グループの外でも使われるようになり、**社会における医療・ケアのあり方に実質的に影響を及ぼすまで**になっている。

(2)研究成果を社会貢献につなげるための臨床倫理実践のネットワークの充実

臨床倫理セミナー 全国各地で開催し、本研究の成果の医療・ケア現場への普及に努めると共に、臨床倫理実践のネットワーク形成を図った。2018年度は各地の臨床倫理セミナー12回、ファシリテーター養成2回、19年度は、臨床倫理セミナー14回、ファシリテーター養成2回であった。19年度第4四半期以降、COVID-19の拡大により、対面式の研修ができなくなったため、以降はオンラインコンテンツの充実やオンラインセミナー開催試行に重点を移した。しかし、オンラインによる臨床倫理セミナー開催は、各地の協力者に企画・参加の余裕がなく、開催は1回、21年度はオンラインセミナー2回であった。他団体によるオンラインの臨床倫理研修にて研究代表者・分担者が講師として本研究の成果の臨床への還元をする機会は25回ほどあった。

事例検討シートの様式の完成 臨床現場における実効性を高めるための改訂を2018年度前半に行った。とくに**医療・ケアチームが臨床の場で事例検討を行う場合に、これからどうするかを確実に見出さねばならないというニーズに応えられる検討シートの様式が不十分であったところ**を改訂して、新しい検討シート3点セットを完成させた¹³。これは従来の考え方を踏襲しているが、様式としては1999年度に策定したシートの、事例提示部分以外の全面的改訂となった。その後改訂された様式は2022年度現在まで変わっておらず、異論も出ていない。

臨床倫理プロジェクトの理論と実践の研究成果の刊行 これまでに研究開発した臨床倫理システムの成果をまとめた書籍の刊行を目指した。上述の研究成果(1)に挙げた成果を含め臨床倫理に関する本研究プロジェクトの理論と実践方法と、臨床従事者の臨床倫理実践事例を併せ、本プロジェクトの現在を示すことを心がけた。その結果、COVID-19拡大の中で出版事情も厳しかったが、出版社の努力により2022年1月に『**臨床倫理の考え方と実践：医療・ケアチームのための事例検討法**』¹⁴を刊行することができた。

「臨床倫理ネットワーク日本」¹⁵の充実 同サイト全体のアップデートをし、スマホ対応にし

た(2018年度)。この後も、ハイパーテキスト化した「臨床倫理オンラインセミナー」改訂^{*16}、「事例検討の進め方」の増補、「心積りノート改訂版」eBook、各地の臨床倫理セミナーの案内等、コンテンツの充実を図った。加えて、2019年度第4四半期以降、COVID-19の拡大により、対面式の研修ができなくなったことを補うため、2020年度に**臨床倫理セミナーの座学部分の動画作成**^{*17}、ハイパーテキスト化した**臨床倫理概説の改訂**、2012年刊行の『**高齢者ケアと人工栄養**』のeBook化^{*18}等を行った。

(3)医療系大学の教育課程への臨床倫理の組み込み

倫理系総合テキストの作成と改訂 医療・福祉系学部課程の中で看護職養成課程を取り上げ、新設2年目の岩手保健医療大学をモデルにして、教育課程に臨床倫理を組み込む方途の研究開発を進めた。すでに同大のカリキュラム作成の過程で、倫理教育の核となる授業科目を5つ選んでいた(1年次:探求の基礎、2年次:看護倫理、人間の生と死、3年次:エンドオブライフケア論、4年次:臨床倫理)。これらについて2018年には2年次までの3科目が開講されており、それらについて授業をしながらテキスト作成を試み、2018年度末には、上記5科目のうち、3年次までに配置した4科目をカバーする統合テキスト『看護学生のための哲学・倫理学・死生学』(2019年度用)を刊行した。これを2019年度に教科書として使いつつ、改訂・増補を加え、年度末に第4学年までの全5科目をカバーする同名テキスト2020年度用を刊行した。同様に、2020年度末には2021年度用テキスト(改訂第3版)を刊行した。

医療・ケア系学生および現職用総合テキストの刊行 2021年度には改訂第3版を授業で使用しながら、その内容を充実させ、学生が考えるための練習問題を多く入れるように努め、他の医療系教育課程においても使えるように増補すると共に、看護職養成課程以外の医療系学部においても使えるよう汎用性を持たせる改訂を加える作業を行った。

その結果、上記研究成果の(1)に記した研究成果である、臨床倫理の基礎理論(皆一緒と人それぞれという根本的把握から、個々の人間関係、社会的要請としての倫理、社会の構造の基礎を説明する)現代社会の人間関係(意思決定支援のあり方等)、高齢者の意思決定支援等に関わる提言を含み、医療系学生のみならず臨床従事者の研鑽にも使える『**医療・ケア従事者のための哲学・倫理学・死生学**』^{*19}を完成させ、医学系専門出版社より刊行した。

<引用文献・参照URL>

- *1 清水哲郎『医療現場に臨む哲学』1997、『医療現場に臨む哲学 ことばに与る私たち』2000、勁草書房
- *2 清水哲郎&臨床倫理プロジェクト『臨床倫理エッセンシャルズ 2016年春版』
<http://clinicaethics.ne.jp/cleth-prj/img/clethessent2016.pdf>
- *3 老年医学会「高齢者ケアの意思決定プロセスに関するガイドライン ~人工的水分・栄養補給の導入を中心として~」
https://www.jpn-geriat-soc.or.jp/proposal/pdf/jgs_ahn_gl_2012.pdf
- *4 <https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-10802000-Iseikyoku-Shidouka/0000197702.pdf>
- *5 清水哲郎・会田薫子『高齢者ケアと人工栄養を考える:本人・家族のための意思決定プロセスノート』2013, 清水監修, 会田編, 大賀由花他著『高齢者ケアと人工透析を考える:本人・家族のための意思決定プロセスノート』2015, 医学と看護社
- *6 清水哲郎(編著)『看護管理者のための 臨床倫理・組織倫理入門』(ナーシングビジネス 2021年春季増刊), メディカ出版
- *7 臨床倫理プロジェクト編『上手に老い、最期まで自分らしく生きるための心積りノート』改訂版(2018年3月)および簡易試行版(2020年3月) <http://clinicaethics.ne.jp/cleth-prj/pa/>
- *8 K. Rockwood, O. Theou, Using the Clinical Frailty Scale in Allocating Scarce Health Care Resources, *Canadian Geriatrics Journal*, 23-3: 254-259, 2020.
- *9 会田薫子『長寿時代の医療・ケア: エンドオブライフの論理と倫理』, ちくま書房, 2019.
- *10 清水哲郎(編集協力・執筆)「特集:認知症者の最善を考える:「臨床倫理検討シートを用いた意思決定支援」, 看護技術 68-6(2022年5月号): 3-56. 清水執筆部分: Part1(4-14), Part 3(23-35), プロジェクト協力者執筆部分: Part 4(36-56)
- *11 「高齢腎不全患者に対応する医療・ケア従事者のための意思決定支援ツール」
<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/dls/cleth/tool.html>
- *12 「アドバンス・ケア・プランニング支援ガイド 在宅療養の場で呼吸不全を有する患者さんに対応するために」
<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/dls/cleth/acp.html>
- *13 <http://clinicaethics.ne.jp/cleth-prj/worksheet/>
- *14 清水哲郎・会田薫子・田代志門(編著)『臨床倫理の考え方と実践:医療・ケアチームのための事例検討法』東大出版会, 2022.
- *15 <http://clinicaethics.ne.jp/>
- *16 http://clinicaethics.ne.jp/cleth-prj/cleth_online/cleth_ol_top.html
- *17 http://clinicaethics.ne.jp/cleth-prj/cleth_online/
- *18 <http://clinicaethics.ne.jp/cleth-prj/pn/index.html#ahn>
- *19 清水哲郎『医療・ケア従事者のための哲学・倫理学・死生学』医学書院, 2022.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計40件（うち査読付論文 14件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 清水哲郎	4. 巻 68(6)
2. 論文標題 認知症の方の最善を考えることと意思決定支援	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 看護技術	6. 最初と最後の頁 4~14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水哲郎	4. 巻 68(6)
2. 論文標題 「臨床倫理検討シート」を活用した認知症患者・家族への意思決定支援	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 看護技術	6. 最初と最後の頁 23-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 会田薫子	4. 巻 23(2)
2. 論文標題 エンドオブライフ・ケア 臨床倫理の事例検討法	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本腎不全看護学会誌	6. 最初と最後の頁 58-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 相澤 出	4. 巻 71(4)
2. 論文標題 地域医療の担い手が捉える過疎地域の家族と介護の変化：宮城県登米市を事例として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会学評論	6. 最初と最後の頁 577-594
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Asai A, Okita T, Tanaka M, et al.,	4. 巻 17(1):
2. 論文標題 Physician use of the phrase “due to old age” to address complaints of elderly symptoms in Japanese medical settings: The merits and drawbacks?	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Clinical Ethics	6. 最初と最後の頁 14-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浅井篤、大北全俊、尾藤誠司	4. 巻 4 (1)
2. 論文標題 共同意思決定過程において患者が注意した方がよい点についての考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 CBEL Report	6. 最初と最後の頁 15-28.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Imai K, Morita T, Akechi T, Baba M, Yamaguchi T, Sumi H, Tashiro S, Aita K, Shimizu T, et al.	4. 巻 23(9)
2. 論文標題 The Principles of Revised Clinical Guidelines about Palliative Sedation Therapy of the Japanese Society for Palliative Medicine	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Palliative Medicine	6. 最初と最後の頁 1184-1190.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1089/jpm.2019.0626. Epub 2020 Apr 13.	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 会田薫子	4. 巻 1321
2. 論文標題 アドバンス・ケア・プランニング (ACP) が目指すもの 「事前指示」「医師の免責」という誤解」、	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 月刊保団連(全国保険医団体連合会)	6. 最初と最後の頁 4-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 会田薫子	4. 巻 4(1)
2. 論文標題 人生の物語りとadvance care planning	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本在宅救急医学会誌	6. 最初と最後の頁 31-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 会田薫子	4. 巻 127(2)
2. 論文標題 認知症を有する人への人工的水分・栄養補給法の考え方	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 内科	6. 最初と最後の頁 275-279
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 相澤出	4. 巻 27(2)
2. 論文標題 住み慣れた地元での暮らしの継続と看取りを実現するために：ニッ井ふくし会の「ホームカミング」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ふれあいケア	6. 最初と最後の頁 28-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 相澤出	4. 巻 71(4)
2. 論文標題 地域医療の担い手が捉える過疎地域の家族と介護の変化：宮城県登米市を事例として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会学評論	6. 最初と最後の頁 577-594
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tanaka, M., Ohnishi, K., Enzo, A. Okita T, and Asai A	4. 巻 22:05
2. 論文標題 Grounds for surrogate decision-making in Japanese clinical practice: a qualitative survey.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 BMC Med Ethics	6. 最初と最後の頁 1~12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s12910-020-00573-4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Sakurai H, Miyashita M, Morita T, et al.	4. 巻 5
2. 論文標題 Comparison between patient-reported and clinician-reported outcomes: Validation of the Japanese version of the Integrated Palliative care Outcome Scale for staff	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Palliat Support Care	6. 最初と最後の頁 1~7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1017/S1478951521000018. Online ahead of print	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Hiratsuka Y, Oishi T, Miyashita M, Morita T, et al.	4. 巻 10(3)
2. 論文標題 Patients' understanding of communication about palliative care and health condition in Japanese patients with unresectable or recurrent cancer: a cross-sectional survey.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Ann Palliat Med.	6. 最初と最後の頁 2650-2661
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.21037/apm-20-2045	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 清水哲郎	4. 巻 56
2. 論文標題 自己決定から共同決定へ 現実の本人・家族を踏まえた理論への歩み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 患者安全推進ジャーナル(日本医療機能評価機構 認定病院患者安全推進協議会)	6. 最初と最後の頁 10-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水哲郎	4. 巻 13-9(181)
2. 論文標題 「看取り」と「終活」：本人にとっての最善を目指して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ナーシング・ビジネス	6. 最初と最後の頁 38-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水哲郎	4. 巻 45-3(179)
2. 論文標題 生命を巡る倫理と対人援助	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ソーシャルワーク研究	6. 最初と最後の頁 189-204
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水哲郎	4. 巻 23(2)
2. 論文標題 「自分らしく生きる」を支えるエンドオブライフ・ケアと意思決定支援	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本在宅ケア学会誌	6. 最初と最後の頁 9-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 日本老年医学会エンドオブライフ小委員会(葛谷 雅文、会田薫子他)	4. 巻 56(4)
2. 論文標題 日本老年医学会「ACP推進に関する提言」(共著)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本老年医学会雑誌	6. 最初と最後の頁 411-416
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 会田薫子	4. 巻 33
2. 論文標題 アルツハイマー型認知症のエンドオブライフ・ケア: 人工的水分・栄養補給法の問題を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Dementia Japan	6. 最初と最後の頁 137-144
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 会田薫子	4. 巻 9
2. 論文標題 超高齢社会の治療選択に関わる意思決定支援	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人間と医療	6. 最初と最後の頁 49-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 会田薫子	4. 巻 39(10)
2. 論文標題 実践!在宅救急 高齢者医療の考え方の変遷とアドバンス・ケア・プランニングについて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Modern Physician	6. 最初と最後の頁 980-984
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 会田薫子	4. 巻 57(12)
2. 論文標題 ACPの倫理的側面に関する質疑応答 遠方の家族をもつ独居者を支える医療・介護現場から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Geriatric Medicine	6. 最初と最後の頁 1205-1208
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 会田薫子	4. 巻 36(3)
2. 論文標題 Shared Decision Makingの意義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 臨床透析(日本メディカルセンター)	6. 最初と最後の頁 7-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 相澤 出	4. 巻 84(3)
2. 論文標題 特別養護老人ホームと自宅での看取り、そしてホームカミング 地域への問題提起としての看取りをめぐるケア	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 295-313
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Atsushi Asai, Taketoshi Okita, Aya Enzo et al.,	4. 巻 29
2. 論文標題 Hope for the best and prepare for the worst: Ethical concerns related to the introduction of healthcare artificial intelligence	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Eubios Journal Asian and International Bioethics	6. 最初と最後の頁 64-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 会田薫子, 清水哲郎	4. 巻 76 増刊号5
2. 論文標題 高齢者ケアの意思決定プロセスに関するガイドライン 人工的水分・栄養補給の導入を中心として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本臨牀	6. 最初と最後の頁 383 - 387
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ouchi Yasuyoshi, Toba Kenji, Ohta Kikuko, Kai Ichiro, Shimizu Tetsuro, Higuchi Norio, Shimazono Susumu, Iijima Setsu, Suwa Sayuri, Nishimura Michiyo, Ninomiya Hideharu, Aita Kaoruko	4. 巻 18-6
2. 論文標題 Guidelines from the Japan Geriatrics Society for the decision-making processes in medical and long-term care for the elderly: Focusing on the use of artificial hydration and nutrition	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Geriatrics & Gerontology International	6. 最初と最後の頁 823 ~ 827
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/ggi.13441	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 会田薫子	4. 巻 121-4
2. 論文標題 高齢者のエンドオブライフ・ケアと延命医療の選択	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 内科 (特集 高齢者医療ハンドブック)	6. 最初と最後の頁 1064-1070
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 会田薫子	4. 巻 147 特別号(2)
2. 論文標題 エンドオブライフ・ケアの一般原則 (生涯教育シリーズ95 認知症トータルケア)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本医師会雑誌	6. 最初と最後の頁 266-268
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 会田薫子	4. 巻 226
2. 論文標題 特集 認知症高齢者の摂食嚥下リハビリテーション 認知症高齢者が食べられなくなったら	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Medical Rehabilitation	6. 最初と最後の頁 69-74.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 会田薫子	4. 巻 2018年秋号
2. 論文標題 特集 高齢者のエンドオブライフ・ケア アドバンス・ケア・プランニング	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Aging & Health	6. 最初と最後の頁 18-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田代志門	4. 巻 101(1)
2. 論文標題 倫理コンサルテーションチーム	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 治療	6. 最初と最後の頁 72 75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浅井 篤, 大北全俊, 圓増 文	4. 巻 7
2. 論文標題 臨床倫理領域の主要時事問題に関する考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 医療コンフリクト・マネジメント	6. 最初と最後の頁 7~15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 相澤 出	4. 巻 102
2. 論文標題 医療過疎地域の在宅医療における医師の知の技法と地域ケアシステムの展開 - ターミナル期のケアにおけるショートステイの活用から -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会学研究	6. 最初と最後の頁 147 169
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計51件（うち招待講演 40件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 清水哲郎
2. 発表標題 本人の人生・価値観と医学的妥当性・適切性の中で
3. 学会等名 シンポジウム「人生の最終段階と透析療法 緩和ケアとACPの役割」東京大学大学院人文社会系研究科上廣死生学・応用倫理講座, 日本老年医学会 他共同主催（オンライン開催）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 会田薫子
2. 発表標題 フレイルの知見をACPIに活かす 臨床倫理の視点から
3. 学会等名 第25回日本老年看護学会学術集会 シンポジウム2「生ききるを支えたい 高齢者の声をどうきくか」（誌上開催）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 会田薫子
2. 発表標題 クリティカルケア看護における倫理的ジレンマへの対応(特別講演)
3. 学会等名 第16回日本クリティカルケア看護学会学術集会（WEB開催：オンデマンド）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 会田薫子
2. 発表標題 高齢者におけるCPRの適正化 ACPの役割(指定講演)
3. 学会等名 第62回日本老年医学会学術集会 シンポジウム9（倫理委員会企画）「非がん疾患における延命医療の差し控えと終了」（WEB開催：リアルタイム・オンデマンド）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 会田薫子
2. 発表標題 経口摂取が困難となった場合の対応 人工的水分・栄養補給法のあり方
3. 学会等名 第116回日本精神神経学会学術集会 シンポジウム4「重症認知症の人にどのような終末期対応を提供するのか 『認知症診療医』認定更新のために」(WEB開催：オンデマンド)(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 会田薫子
2. 発表標題 今だからこそ問う、あなたの臨床倫理 意思決定支援者としての役割発揮(教育講演8)
3. 学会等名 第51回日本看護学会 看護管理 (WEB学術集会：オンデマンド)(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 会田薫子
2. 発表標題 エンドオブライフと性差 倫理思想の観点から
3. 学会等名 第14回日本性差医学・医療学会学術集会 シンポジウム4「老年医学の重要課題と性差」 (WEB開催：リアルタイム・オンデマンド)(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 会田薫子
2. 発表標題 医療倫理 救急・集中治療の死生学(教育講演)
3. 学会等名 第48回日本集中治療医学会学術集会 (WEB開催：リアルタイム・オンデマンド)(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 会田薫子
2. 発表標題 医療倫理と臨床倫理（教育講演）
3. 学会等名 第48回日本集中治療医学会学術集会（WEB開催：リアルタイム・オンデマンド）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田代志門
2. 発表標題 インフォームド・コンセントはどう変わるか
3. 学会等名 第20回CRCと臨床試験のあり方を考える会議 シンポジウム「《自発的な》同意の意思って？」（ウェブ開催）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田代志門
2. 発表標題 意思決定プロセスにおける「患者の意向の尊重」とは その複雑さを捉えるために
3. 学会等名 第18回日本臨床腫瘍学会学術集会 シンポジウム「治療方針決定支援プロセスにおける多職種の役割（応用編）」（ウェブ開催）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 清水哲郎
2. 発表標題 地域の文化に配慮した高齢者のエンドオブライフ・ケア(教育講演)
3. 学会等名 日本老年看護学会第24回学術集会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清水哲郎
2. 発表標題 ACP-意志決定支援をめぐる：患者がEOLディスカッションや予後について話し合いを希望しない場合(シンポジスト・ミニレクチャ)
3. 学会等名 第27回 日本乳癌学会学術総会 スポンサーシップシンポジウム「アドバンスケアプランニング」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清水哲郎
2. 発表標題 「自分らしく生きる」を支えるケア 臨床死生学の視点から(特別講演)
3. 学会等名 第24回日本在宅ケア学会学術集会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清水哲郎
2. 発表標題 「地域で暮らす」を実現する本人・家族の意思決定支援(教育講演)
3. 学会等名 北日本看護学会第24回学術集会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清水哲郎
2. 発表標題 厚生労働省プロセス・ガイドライン2018年改訂版とACP(特別倫理講演)
3. 学会等名 日本ACP研究会第4回年次大会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清水哲郎
2. 発表標題 『ガイドライン2018改訂版』はどのような転換を推進するか(シンポジスト提題)
3. 学会等名 第43回日本死の臨床研究会年次大会 シンポジウム 『「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン」の意味とその応用：医療モデルから生活モデルへの転換』（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清水哲郎
2. 発表標題 意思決定支援の臨床倫理：ALS患者の侵襲的人工呼吸器選択をめぐって(シンポジスト提題)
3. 学会等名 第37回日本神経治療学会学術集会 シンポジウム 「地域で支える神経難病診療体制の現状と展望：患者・家族の意思決定支援へのかかわり」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清水哲郎
2. 発表標題 エンドオブライフ期の医療・ケアの臨床倫理(シンポジスト提題)
3. 学会等名 第31回日本生命倫理学会年次大会 学会企画シンポジウム「エンドオブライフ・ケアと人生の最終段階ガイドライン」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清水哲郎
2. 発表標題 情報共有 - 合意モデル = ACPモデル による意思決定支援の実現に向けて(シンポジスト提題（査読あり）)
3. 学会等名 第31回日本生命倫理学会年次大会 公募シンポジウム「透析療法の意思決定支援のあり方 エンドオブライフ・ケアの論理と倫理」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 会田薫子
2. 発表標題 フレイル評価を組み込んだACPによって不要なCPRを回避する(招聘講演)
3. 学会等名 第22回日本臨床救急医学会学術集会 シンポジウム10「傷病者の意思に沿った救急現場での心肺蘇生のあり方に関する提言はどこまで受け入れられているか」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 会田薫子
2. 発表標題 延命医療への対応 本人らしさを支える意思決定支援(招聘講演)
3. 学会等名 第27回東京都臨床工学会学術集会 シンポジウム2「Bioethics ~ 生命維持装置の専門家として今、考える生と死」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 会田薫子
2. 発表標題 「ACP推進に関する提言」の目標と定義について(指定講演)
3. 学会等名 第61回日本老年医学会学術集会 シンポジウム2(倫理委員会企画)日本老年医学会「ACP推進に関する提言」~提言に至る背景と解説
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 会田薫子
2. 発表標題 救急医療の死生学 脳死の二重基準の意味と意義(教育講演)
3. 学会等名 日本小児救急医学会脳死問題検討委員会主催・日本臓器移植ネットワーク共催「第9回小児救急における脳死患者の対応セミナー」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 会田薫子
2. 発表標題 小児の脳死下臓器提供：臨床倫理の視点から(招聘講演)
3. 学会等名 第33回日本小児救急医学会学術集会 パネルディスカッション3「小児の脳死下臓器提供を考える」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 会田薫子
2. 発表標題 透析療法におけるエンドオブライフ・ケア：臨床倫理の視点から(招聘講演)
3. 学会等名 第64回日本透析医学会学術集会 ワークショップ9「透析医療における終末期医療2」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 会田薫子
2. 発表標題 医療者が理解すべき死生観：臨床死生学の役割(招聘講演)
3. 学会等名 第27回日本乳癌学会学術総会 合同パネルディスカッション「進行・再発乳がんの終末期医療」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 会田薫子
2. 発表標題 在宅で生き終わるということ(指定講演)
3. 学会等名 第3回日本在宅救急医学会学術集会 シンポジウム2「在宅や施設で急変したときどうするか、不要な搬送を減らせるか？」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 会田薫子
2. 発表標題 医療倫理(指定講演)
3. 学会等名 第47回日本救急医学会学術集会 専門医共通講習(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 会田薫子
2. 発表標題 人生の最終段階における医療とケア: ACPにフレイルの知見を活かす(招聘講演)
3. 学会等名 第38回日本認知症学会学術集会 プレナリーレクチャー16(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 会田薫子
2. 発表標題 ACP: 患者本人の意思を尊重するために(指定講演)
3. 学会等名 第22回日本腎不全看護学会学術集会 交流集会9「さぁ!一緒に考えよう 高齢透析患者さんのアドバンス・ケア・プランニング(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 会田薫子
2. 発表標題 事例検討法
3. 学会等名 第31回日本生命倫理学会年次大会 公募ワークショップ 「臨床倫理検討シートの進化と現在」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 会田薫子
2. 発表標題 高齢患者の透析療法におけるフレイル評価の重要性: 臨床倫理的に適切な意思決定支援のために
3. 学会等名 第31回日本生命倫理学会年次大会 公募シンポジウム 「透析療法の意思決定支援のあり方 エンドオブライフ・ケアの論理と倫理
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 霜田 求
2. 発表標題 Major factors of passive or negative reaction against clinical ethics conference
3. 学会等名 The 16th International Society for Clinical Bioethics, Krakow/Poland (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田代志門
2. 発表標題 鎮静と安楽死を分かつものとは(シンポジスト提題)
3. 学会等名 第43回死の臨床研究会年次大会シンポジウム「苦痛緩和のための鎮静と安楽死 尊厳ある死と死ぬ権利をめぐる」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 相澤 出
2. 発表標題 地元投じる一石としての「あんしんノート」 ニツ井ふくし会による在宅の看取りの事例集は地元になにをもたらすか?
3. 学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清水 哲郎
2. 発表標題 意思決定支援の臨床倫理
3. 学会等名 第20回日本医療マネジメント学会学術総会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 清水 哲郎
2. 発表標題 今から最期までの意思決定支援と臨床倫理
3. 学会等名 第7回日本精神科医学会学術大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 清水 哲郎
2. 発表標題 医療・ケアに関する本人の意思と最善の間 本人の人生・価値観に基づく意思決定支援
3. 学会等名 第30回 日本生命倫理学会年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 会田 薫子
2. 発表標題 長寿時代のエンドオブライフ・ケア
3. 学会等名 第67回日本口腔衛生学会第23回認定医研修会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 会田 薫子
2. 発表標題 救急医療の死生学 脳死の二重基準の意味と意義
3. 学会等名 第32回日本小児救急医学会第8回脳死患者への対応セミナー（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 会田 薫子
2. 発表標題 透析医学における臨床研究倫理
3. 学会等名 第63回日本透析医学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 会田 薫子
2. 発表標題 認知症者の終末期医療をどう考えるか
3. 学会等名 第37回日本認知症学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 会田 薫子
2. 発表標題 フレイルとACP 不要なCPRを避けるための臨床倫理
3. 学会等名 第46回日本救急医学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 会田 薫子
2. 発表標題 高齢者医療とエンドオブライフ・ケアの倫理
3. 学会等名 第31回日本総合病院精神医学会総会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Aita K
2. 発表標題 End-of-life care for the aged in Japan: withholding and withdrawal of artificial hydration and nutrition,
3. 学会等名 The 62nd Congress of The Korean Geriatrics Society（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田代 志門
2. 発表標題 意思決定支援を支援する 臨床倫理サポートの試み
3. 学会等名 日本在宅医学会第20回記念大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田代 志門
2. 発表標題 ジレンマメソッドの日本への導入 その可能性と課題
3. 学会等名 第30回日本生命倫理学会年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 相澤 出
2. 発表標題 「ホームカミング」のある施設での看取り - 秋田県能代市の社会福祉法人二ツ井ふくし会の試みを事例として -
3. 学会等名 日本文化人類学会第52回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 相澤 出
2. 発表標題 医療過疎地域における訪問看護ステーションの役割と地域包括ケア - 宮城県登米市の事例から -
3. 学会等名 第65回東北社会学会大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計19件

1. 著者名 清水哲郎・会田薫子・田代志門	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 165+xii
3. 書名 臨床倫理の考え方と実践：医療・ケアチームのための事例検討法	

1. 著者名 清水哲郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 医学書院	5. 総ページ数 271+x
3. 書名 医療・ケア従事者のための哲学・倫理学・死生学	

1. 著者名 清水哲郎 (編著)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 メディカ出版	5. 総ページ数 168
3. 書名 看護管理者のための臨床倫理・組織倫理入門	

1. 著者名 宮下光令 (編集・分担執筆)、清水哲郎 (分担執筆)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 青海社	5. 総ページ数 +397 (宮下17-22、204-209、清水 376-384)
3. 書名 緩和ケア・がん看護 臨床評価ツール大全 (宮下執筆: 症状などの包括的評価(2)、遺族によるQOLの代理 評価 / 清水執筆: 臨床倫理)	

1. 著者名 会田薫子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 筑摩書房 東京	5. 総ページ数 304
3. 書名 『長寿時代の医療・ケア エンドオブライフの論理と倫理』	

1. 著者名 会田薫子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 南山堂 東京	5. 総ページ数 279 (担当執筆部分: 189-196)
3. 書名 平原佐斗司・桑田美代子 (編) 『認知症の緩和ケア』担当執筆: 第7章D. 治療の選択にフレイルの知見を活かす 臨床倫理の視点から	

1. 著者名 会田薫子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中外医学社 東京	5. 総ページ数 223 (担当執筆部分:127-131)
3. 書名 石橋由孝(監・編)上條由佳・藤本志乃(編)『腎不全・PD診療TRC』担当執筆:5章3 高齢者医療の治療選択 フレイルの知見を臨床に活かす」	

1. 著者名 清水哲郎	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中外医学社 東京	5. 総ページ数 223 (担当執筆部分:132-137)
3. 書名 石橋由孝(監・編)上條由佳・藤本志乃(編)『腎不全・PD診療TRC』担当執筆:5章3 高齢者ケアに必要な視点 人間における倫理の成り立ち	

1. 著者名 会田薫子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 医学書院 東京	5. 総ページ数 440 (担当執筆部分:381-387)
3. 書名 大内尉義(編)『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 老年学第5版』担当執筆:第36章 人生の最終段階における医療・ケアの考え方	

1. 著者名 田代志門	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金芳堂 京都	5. 総ページ数 288 (担当執筆部分:36-48)
3. 書名 伏木信次・櫻則章・霜田求(編)『生命倫理と医療倫理 第4版』担当執筆:第4章 臨床倫理	

1. 著者名 会田薫子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金芳堂 京都	5. 総ページ数 288 (担当執筆部分: 116-130)
3. 書名 伏木信次・櫻則章・霜田求(編)『生命倫理と医療倫理 第4版』 担当執筆: 第11章 エンドオブライフ・ケア	

1. 著者名 霜田 求	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金芳堂 京都	5. 総ページ数 288 (担当執筆部分: 182-190)
3. 書名 伏木信次・櫻則章・霜田求(編)『生命倫理と医療倫理 第4版』 担当執筆: 第16章 再生医療	

1. 著者名 浅井 篤	4. 発行年 2020年
2. 出版社 医学書院 東京	5. 総ページ数 296
3. 書名 近藤克則他編『学生のための医療概論 第4版』 担当執筆: 第1章2 患者の権利を尊重する、3 医療現場の倫理	

1. 著者名 田代志門、会田薫子、清水哲郎	4. 発行年 2018年
2. 出版社 金原出版	5. 総ページ数 176
3. 書名 日本緩和医療学会ガイドライン統括委員会『がん患者の治療抵抗性の苦痛と鎮静に関する基本的な考え方の手引き 2018年版』、担当部分: 章 倫理的検討(85-90)	

1. 著者名 会田薫子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 日本医療企画	5. 総ページ数 183
3. 書名 ヘルスケア総合政策研究所編『医療白書2018年度版』、担当部分：第5章 患者の意思決定支援に向けてA C Pをどのように普及・推進すべきか(135-139)	

1. 著者名 会田薫子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 224
3. 書名 日本家政学会編『現代家族を読み解く12章』、担当部分：臨床倫理・死生学と家族(148-149)	

1. 著者名 浅井篤	4. 発行年 2018年
2. 出版社 社会評論社	5. 総ページ数 168
3. 書名 梶谷剛・浅井篤編『実践する科学の倫理』、担当部分：医療にかかわる倫理的課題について(11-30)	

1. 著者名 相澤 出	4. 発行年 2019年
2. 出版社 みらい	5. 総ページ数 196
3. 書名 砂子田 篤・高橋 学編著『医療福祉入門』、担当部分：第6章 「患者」とは(83 97)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

臨床倫理ネットワーク日本
<http://clinicaethics.ne.jp/>
 臨床倫理プロジェクト
<http://clinicaethics.ne.jp/cleth-prj/>
 臨床倫理：研究開発活動
<http://clinicaethics.ne.jp/cleth-prj/activities.html>
 臨床倫理オンライン・セミナー
http://clinicaethics.ne.jp/cleth-prj/cleth_online/
 本人・家族の意思決定支援
<http://clinicaethics.ne.jp/cleth-prj/careplanning.html>

上述のサイトはすべて「臨床倫理ネットワーク日本」の下にあるが、本研究のプロジェクトのホームおよび、研究成果が老いてある主要な場所を挙げてある。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	会田 薫子 (AITA Kaoruko) (40507810)	東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・特任教授 (12601)	
研究分担者	田代 志門 (TASHIRO Shimon) (50548550)	東北大学・文学研究科・准教授 (11301)	
研究分担者	霜田 求 (SHIMODA Motomu) (90243138)	京都女子大学・現代社会学部・教授 (34305)	
研究分担者	相澤 出 (AIZAWA Izuru) (40712229)	岩手保健医療大学・看護学部・講師 (31204)	
研究分担者	濱中 喜代 (HAMANAKA Kiyo) (70114329)	岩手保健医療大学・看護学部・教授 (31204)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	浅井 篤 (ASAI Atsushi) (80283612)	東北大学・医学系研究科・教授 (11301)	
研究分担者	宮下 光令 (MIYASITA Mitsunori) (90301142)	東北大学・医学系研究科・教授 (11301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関